

「ソフォオニスバ」(又は、打倒されたハンニバル)

ナサニエル・リー 著
千 葉 孝 夫 訳

解 題

英国王政復古期の悲劇作家ナサニエル(通称ナット)・リー(Nathaniel Lee)(一六四九?—一九二)は、ウエストミンスター・スクールとケムブリッジ大学トリニティ・カレッジを卒業後、俳優を志したが、舞台まげ(気おくれ)の所為で果たせず、作劇の道へと転向した。「ネロ」(一六七四)に始まる彼の劇作は、屢々古代史に取材し、愛と勇気とをテーマとした「英雄悲劇」が殆んどであるが、内容的には、当時の政治問題の反映が見られるとも言われる。ハンニバルの敗北を描いた「ソフォオニスバ」(一六七六)や、アレクサンドロス大王の死を扱った、無韻詩で書かれた「競い合う王妃達」(一六七七)がその代表作。ドライデンとの合作「ギーズ公爵」(一六八二)や、「コスタンティヌス大帝」(一六八四)もある。その劇世界は、熱気に溢れ、大言壮語と突飛な言行が飛び交い、死と狂気の過剰が、(伝統への回帰も)、見られる。一六八四年には、彼自身発狂し、五年間精

神病院に収容されたが、退院後も大酒を啜り続けるという不摂生の挙句、転落死してしまうことになり、波瀾万丈の生涯の幕を閉じた。

(史実上のソフォオニスバ) 彼女は、古代国家カルタゴの貴族階級の女性で、將軍ハ(テ)スドルーバル(Hasturba)の娘であり、カルタゴ人としての実名は、サファンバル(Saphanba'al)。ヌミディアの王子マシニッサと婚約していたが、第二次ポエニ戦役(BC二一八—二〇二)で、自分への支持を取付けたい、というその父の政治的目的の為、マシニッサの宿敵(同じヌミディアの)シファックスと結婚させられた。二〇三年、マシニッサ率いるローマ軍に、カルタゴ軍と同盟を結んでいたシファックスが敗退すると、ソフォオニスバを捕囚としたマシニッサは、彼女と結婚するが、彼女から、彼が反ローマ的影響を及ぼされはしまいか、と憂慮する、ローマ軍の司令官スキピオによって、その結婚は許可されず、彼は、己むなく彼女との結婚は諦めたが、彼女が捕囚となつてローマへ送られる、という屈辱を免れさせるべく、彼女に毒薬を送ると、彼女は、躊躇することなくそれを飲

み干して、薄倅なりし己が生に、我と我が手でピリオドを打ったのだ。
この史実に基づいて、ジョン・マーストン「ソフォニスバ、又は、
女性の鑑」(二六〇二)、ピエール・コルネーユ「ソフォニスバ」(二
六六三) ナサニエル・リー「ソフォニスバ、又は、打倒されたハンニ
バル」、(一六七六)、ジェイムズ・トムソン「ソフォニスバ」(一七三
〇)の他、トリッシーノ、メレ、アレフィエーリ等の作家も、夫々悲
劇を仕立て上げたのであった。

オックスフォード大学への前口上

—ジョン・ドライデン氏記述

その昔、我等が舞台芸術を初めて講じたテスピス教授は、田舎の祝祭で、荷車に乗った俣、俗語を謳ったのであります。それが真実なり、と証明するのに、もしもラテン語を用いても、差し支えなければ、

テスピスは、己が詩をば、荷車に載せて運んだ、ということでありませぬ。しかし、ホラティウスが、己が著書の、何処かの頁で言っておりますが、⁵かのエスキラスこそ、今迄舞台に立ったことのある役者の中で、最初のいかさま師だつたそふでありませぬ。

しかし、テニスコートで、ボール代わりに、詩人達を抛り上げるという、例のアカデミックなスポーツは、アテーナイでは、全く知られてはいなかつたのであります。

ですが、我がイギリス国民の手腕だつたのです、絶えず、何か新しい改革を企てている、ということはね。

して、今から何年か経つても、秩序無き乱世が続いておるとしたならば、

長老教会に支持されるジャックは、⁴此処にその王座を築き、日に一度説教することによつて、ざつと間に合わせに、浴槽を作るのですが、

どの祈禱でも、一篇の芝居よりも、もつと長つたらしいものになることとでしよう。

すると、貴方がた異教徒の知者才人達は、誰しも身の破滅ということになりませぬ。

カトリック隠謀事件が本当に起つたのだ、と信じようとはしなかつた廉でね。

ざりとて、我々は、宣告を下したい、とも思ひませぬ、

我々のそもその原点である、荷車に乗つていた場合であつてもね。

オッカムや、⁵ダン・スコトゥスは、⁶学識豊かだとは申せ、没落するに違ひありませぬ、

教皇の三重冠の、主たる支持者だつた、という廉でね、

して、破滅の機が熟しているアリストテレスは、

人の魂は、オルガンのパイプなり、と彼が呼んでいた、と一部の人は言つておりますが、

それは、ちよつぱり語源の（知識の）助けを借りれば、

靈感（天来の妙想）のパイプと呼ばれることになりませぬ。

皆様は、いとも賢明な判断力を働かされて、更にそれ以上のことがお見通しになれませぬ、

何しろ、つい最近、小麦の山の中から、一粒の鴉麦を発見されたのですからな。

これが、我々の慰めなのです、司教と王冠とを、二つながら嫌つてゐる人々を除いて、今迄、我々を野次り倒すような人は誰もい

なかつた、ということがね。

登場人物

- ハンニバル カルタゴの將軍
- マハーバル 副司令官
- ボミルカー 騎馬隊・象隊の隊長
- スキピオ ローマの執政官
- ラエリウス スキピオの副官
- ヴァッロ 護民官
- マシニツサ ヌミディア国王、ソフォニスバと結婚
- トレベリウス ローマの士官
- マツシーナ マシニツサの甥
- メナンダー マシニツサの腹心の家来
- ソフォニスバ カルタゴの貴婦人、將軍ア(ハ)スドルーバルの娘、シファックスと結婚したが、マシニツサと再婚
- ロザリンダ ローマの貴婦人、ハンニバルの愛人
- レザム^ムペ
- メルナ ソフォニスバの侍女で、腹心の家来。
- アグラ^ラウ^ウヴェ
- クマーナ } ベローナ女神の女祭司

一幕一場

ハンニバル、マハーバル、ボミルカー、護衛兵達、及び、從者達、登場。

ハンニ 戦勝が、月桂樹の小枝を添えて、我が軍の武力を飾りたててくれ、

ローマは、血の涙を流して、我が方を憤激させたことを嘆き悲しんだのだ。

神々宛らに、我々は、突兀峨々たるアルプスの峻嶺を過ぎり、

我々が目指す道を鎖す雪を溶かし、シュツシュツと音をたてる戦車を駆って、

煙る豪雨を突破し、永劫に流れ続ける小川(氷河)を涉って、進軍して行つたのだ。

後世が、痛々しくも、信じるや、に思われることは、

焼けつくような岩山を切り拓いて進み、

酔を沁み込ませた、恐るべき火炎をば、敵に浴びせかけてやつたことだな。

その恐るべき威力は、鉄石にも比すべき、敵の剛勇をも打ち拉いでやつたし、

我々が、岩石を根こそぎにし、堅牢無比の

ありとあらゆる錠をもこじ開け、その巨大な

障壁を撤去し、山々を越え、

氷の球や、堅い雪片を突破しつづつ、進軍するのを見ては、流石に、

造化もはつと驚いたものであつたな。

我が軍の最後尾の象に乗っていて、予が眠っている間に、

アルヌスの霧深い湿地帯や、深い沼沢地で、

15

一筋の光明をば、予は、喪つてしまったのだ、何しろ、カルタゴ軍は、

骨が折れる、戦の労苦を味わって、我々の情熱や勇氣、それに、気前がいい造化が貸し与えてくれた健康の貯えをも、残らず使い果たしてしまつたのだからな。

マハー 血の巡りの悪いあの町が、一体如何なお返しをしてくれたでしょうかな？

敵方の賞賚は博しながら、貴方は、友人味方達には、裏切られなさつたのです。

20

海外で、貴方が、剛勇を奮つて、高名な戦を闘つておられる間に、(国内で、) 叛逆者のハンノーが、貴方の破滅を計つたのですな。

貴方の救援の為に、如何な救済策も講じられはしませんだ、何しろ、ローマへは、絶えず情報を送られ続けていたからです、それは、カルタゴ軍の兵力を暴露し、

25

それが、何方への進路を取つたのか、又、その兵員数が如何程のものなのか、をも知らせるものでしたからな。

ボミル 次のような策略で、ご舎弟の死が画策されたものですな。

貴方とは別途に、弟御が、皇帝ネロを相手に闘つておられました時、あの野蛮残忍な政治家のことをば、ハンノーは、先刻承知しており、もしも、勇猛なアスドルバルが、貴方と力を併せるならば、ローマ人達は、自分達が安全無事だ、という希望を抱くことは出来ず、

30

地上の如何な兵力も、彼等の帝国が一旦喪われてしまつたなら、それを救えはしなかつたことでしょう。

それ故、彼は、悪辣な策略を弄して、何もかも征服せずには已まぬ、貴方の二つの軍勢をば、分割してやろう、と

計つたものですな。

忌まわしい彼の陰謀が、如何程宿命的な成功を取めたことでしょうか、

貴方のご舎弟と共に、その軍勢が全滅しました時にはね、

ハン二 帝王というものは、大政治家達を雇つている間、注意して見ていなければいかんのだな、

自分達が築き上げているものを、その連中は、こつそりとぶち壊しているのかも知れぬからな。

又、離反してゆく帝王麾下の指導者達も、陸上だけで

知られている訳ではなく、海上でも、それと分かるものだ、

40

秘密裡の、手練の術策によつて、艦隊が分裂した場合には、女達の目も、兵士達の気分をも、メロ／＼に溶かし蕩かしたことになる訳だからな。

ボミル 今や、悪魔達が挙つて、その叛逆者達をば、地獄へと引つ立てて行くことになりましょう、

何しろ、復讐を果たす為にか、又は、黄金を手に入れる為、その連中は、己が祖国をあつさりと売り渡してしまつたのですからな。

ハン二 一体如何程、あの下郎は、恐れ戦いたことだろう、もしも、

彼等が、トレビア河畔か、

45

トラシメネ湖畔、又は、カンナエの町での、

ローマ軍の恐るべき敗走ぶりをば、目にしさえしたならばね。

其処では、運命の三女神達が、ローマ方の織機に掛かつていた糸を噛み切つてしまつたのだ、

恰も、彼女達の手が、人間の宿命の糸を断ち切るのに疲れてしまつたかのようにね。

ボミル 其処では、八十名の勇猛な元老員議員達が、戦死し、七万名の兵士達の血が流されましたが、

50

偉大なる武人アエミリウスの死が、我が方の戦意を昂揚（戦勝征服）¹⁴によって得た土地を増大拡張）させたのですな。

ハン二 戦場が、限なく深紅の殺戮に蔽われ尽した時、

我々は、軍馬を駆って、血の川の中を、遮二無二突進したのだ。

一方、亭々と聳え立つ、天国の城壁の隙間胸壁からは、銘々の神々が、下界を見下ろし、それ程多くの、何千名という将兵

が

斃れ伏すのを見ては、嘆き悲しんで、敵かにその頭を打ち振り、それから、敵の返り血を浴びた我々が、それ程赤く染まっているのを見ては、顔面蒼白になったのだな。

マハー あれは、苛酷この上ない非運に相応しい時だったのですな、

勝利の女神が、「英雄（勇士）が丘」に座り、

すっかり血走った俣のその目をば、戦場の騒乱に向け、につこり笑って、その翼をばたくと打ち振り、その目を賛美した、

あの時はね。

ハン二 それでは、我々は、結局、こんな風に報われたことになるのか？

彼等は、我々が陥っていた危険をば、敢て馬鹿にしながら、批判する心算かな？

只管損害悪だけを云々し、真昼迄も眠りこけ、

贅沢な饗宴へと群がり集まり、高価な葡萄酒を飲んで、

消沈した意気を、無理矢理昂揚させている、愚鈍な顧問官共め、

スキピオ相手に闘う代りに、急遽赴いて、

カルタゴに火を放ち、栄光あるこの国を、荒廃させてやろう。

彼等が貯め込んだ財宝を、残らず集めて溶かし、彼等の渴いた喉の

中へと、煮え滾った黄金を注ぎ込んでやろうぞ。

ボミル おやり下さい、偉大なるお方、彼等の頼りになる金庫を焼や

し、

彼等の際立った尊大傲慢さを、滅茶苦茶にしてやって下さい。

マハー 彼等の白貂の毛皮の外套が、煙をあげて燃えるのを見ては、

私は、如何程唾い出したくなることでしょうか！

物凄い火炎が、鱈腹食物を飲み下す、彼等の喉を詰まらせてくれればいいのに！

ハン二 マハーバル、待つてくれ、カルタゴが、この私を虐待したと

は申せ、

私が、不法不当を蒙ったにも拘らず、あれは、依然として、私の祖国なのだからな。

我々の武技軍事の巨匠である、我が父上は、

（彼は、私に命を授けてくれながらも、大音声の闘いの声を聞いていたのだがな、）

この私をば、ローマの仇敵にしてやるぞ、と誓って約束してくれたのだ、私が幼少の頃、

ミルクから私を引き離して、兵士が流す血の中で、私を養い育て、頑強剛毅になるがいい、と私に教え込んでくれたのだからな。

ローマの輝かしい名声が翳って、地に堕ちてしまい、

その黄金の尖塔が、一つ残らず地上に毀ち倒れてしまう迄も、

全世界を統べる、巨大な女帝たるローマを侵略するように、とね。

ボミル そのずつしりと重い誇りを支えるべく、今迄長きに亘って、千々に乱れる世界をば、二分してきたカルタゴとローマとが、

互いに、もうこれ以上、相手の強大な支配統治に耐えられなくなり、

神々も、前者か後者の何れかに、勝利を授けてくれるに違いありません、

せぬ、

何しろ、えらく堂々たる力を、この両者は授けられていることとて、その何方もが、天国の管理をば、洗い漂い引き受けられる程なので、

65

60

55

70

すからな。

マハー スキピオを（直接の）相手として、ローマに対して、貴方が抱いていらつしやる

持ち前の（当然の）憎しみに加えて、恋心が、否応無しに、貴方を戦へと駆り立てているのですな。

何しろ、捕囚として、ロザリンドが其処へ留め置かれているのですからな。

全くもって！ 彼は、敢て貴方の恋心を担保に取って置こうとしているのでしょうか？

彼女程の美貌の持主は、人が揮う剣も、その剣を握る手も、人の心を、思いの俣に支配出来るのですからな。

ハンニ おお、敬愛するマハーバルよ！ あんたは、何時も優しくしてくれたな。

私の美点長所は、残らず見ていてくれたが、私の咎落度には、目を瞑っていてくれたのだ。

もしも、私が、あなたの忠言勧告を聞き入れて、部下の兵士達を指揮していたとしたなら、

彼等の歓びを受けて昂奮し、死者達を跨ぎ越えて、

ローマへ、ローマへと赴いていたことだろうに、我が武人よーだが、喪われてしまったのだ、

つい最近何時間もの時間を犠牲にしてしまう因となった、あの一時間ね！

神々や、好機は、さつさと大急ぎで、馬を駆って行ってしまうものだ。⁽¹⁶⁾

カプアで、快楽にこの身を任せて、私は、ヘナヘナと柔弱になってしまい、
一人の愛人と引換えに、私は、全世界を手放してしまったのだ。

100

90

マハー 貴方は、全世界を惜しんでおられるのですからな？ もし

も、私が、それ程の剛勇の持主をも従えることが出来るものなら、たとえ、私が、大ジョーヴ神その人だったとしても、私は、天国をも手放してしまうことでしょうかな。

ですが、私は、無骨者で、女性向きには出来ておらず、私の運命は、粗雑この上ない鑄型に嵌め込んで、造化が造ってくれたものですからな。

ハンニ ローマ軍の陣営へと、急ぎ赴くのだ、ボミルカー、飛んで行ってくれ、

偵察隊を同道し、亡霊宛らに、自分達の姿を見られることなく、向こうの状況を窺い、

敵の動静を察知するのだ。

もしも、あんたが、適切この上ないことを知り得るものなら、一体何処で、

ロザリンドが、自由解放を嘆き求めているものか、を探り出すがい。

あなたが、栄光の花冠を頭上に頂こう、と骨を折るように、彼女を

捜し求めてくれ、
戦勝を博した上で、あんたが、戦利品を捜し回れるようにな。（一同、退場）

幕が開くと、心地よい小洞穴が見える。マシニッサ王、マッシーナ、及び、メナンドー、土手に坐っている。静かな音楽、聞えてくる。

マシニ 恋とは、王冠を飾る、こよなくけざやかな宝石で、

野心を燃え立たせ、名声を飾り立て、

115

110

楽しい希望を抱かせて、苛酷な我々の苦痛を紛らわせ、
雨霰と飛び交う投げ槍の真つ只中で、兵士を微笑ませるものなのだ
が、

偉大なその記念物が喪われてしまった、私にとつては、すっかり喪
われてしまったからには、

名声も、帝国も、如何程惨めなものになるに違いないことだろう
か！

メナン ですが、貴方は、嘗ては、違った傾向のお心を抱いておられ
ましたが、

依然として、貴方は、支配統治するのが、神宛らに、如何に素晴ら

しいことであるものか、を語っておられましたな、

神秘的な帝国の王位に、唯独り就いていることがね、

して、王座を眺められた時、貴方のお顔は、如何に輝いていたこと

でしょうか！

未だ成年にも達しないうちから、堂々として大胆不敵であり、

微笑みながら、お父上の王笏を持つておられたものでしたな。

して、若年のうちに、年老いたなら、自分が、如何に支配統治する

心算なのか、を語っておられましたな。

マシニ あの頃、私は、野心を愛していたが、今や、忌み嫌っている
のだ。

マツシ 野心とは、一体如何いものでしょうかな？

マシニ 権力への渴望だな。

栄光宛らに、息子よ、それは、人殺しを許すのだな。

派手に悪事を働きたい、という激しい誘惑、

大胆不敵な者や、引つ込み思案な者を、共に引きずり込む餌、

高価な犠牲を払った、この上ない大罪への償いなのだ。

何しろ、もしも、我々が、敗者を死神に従わせるとなつたなら、

我々は、戦場における殺人者以外の何者にも、なれる筈がないのだ
からな。

メナン 雄々しい気魄の持主の場合には、野心が、最早、

帝国への取持ち役や、権力への渴望にならないのは、

花嫁の場合には、当然の欲びが、淫ら心にはならず、

ウエストアリス(ウエスト神殿で聖火を守る処女祭司)の場合には、

優雅上品さが、尊大高慢さにはならぬのと同じことですな。

マシニ では、そういうことにしておくがよい。だが、私は、もうこ
れ以上、お手上げにはなるまい。

恋が、憧れの国の岸辺で、私を難破させたからには、

いや、だが、もしも、私が、嵐に遭つても、生き残つてみせるぞ、

という気魄の持主であり、

岩礁に向つて、乃至は、流砂を越えて、敢て進み行けるとしたなら、

何しろ、恋が、力を揮えるものなら、もしも、ウエヌスが、ユノー

宛らに、命令を下したとするならば、

アルキデース(ヘラクレス)が、昔やつただけのことが、敢て私に⁽¹⁶⁾

も出来ただろうからな。

だが、私は、救いようがなくなつてしまった。私には、今や、何も

出来なくなつてしまったのだよ、マツシーナ。

恋の突風に吹かれる度毎に、蘭草宛らに、私は、頭を下げる始末な

のだからな。

この私は、最近、随分變つてしまったのではないかな？

マツシ ああ！

貴方は、萎れた花か、山中に生えている草みたいにお見えになりま

すぞ。

マシニ ソフォニスバ、おお！

マツシ 一体何故、殿は、溜息を吐いていらつしやるのですかな？

135

130

125

120

150

145

140

お話し下さい。何しろ、私が、剣を揮つて、貴方の報復をして差上げることからな。

貴方のお胸を引裂いているのは、一体如何な残忍な禿鷹なのですか？

糜爛した傷口宛らに、貴方から、安静を奪つてしまつたのですな。

貴方は、狂乱の態となられ、夜通し寝もやらず、

呻吟を重ねて、かゝかゝと鳴いている大鴉共をば、ぎよつと怯えさせられることでしょうか。

貴方に顔を響めさせ、つくづくと考え込ませるような、死ぬ程にも辛い、そんな悲歎を抱かせたのは、一体誰だつたのでしょうか？

マシニ 私の悲歎という重荷が、ああ、お前には耐えられぬことだらうな？

マツシ この私の心が、恐怖を抱くことがありうる、などと、貴方は、お考えになるのですか？

貴方の為であつても、この私が耐えられぬこととは、一体如何なことでしようかな？

マシニ マッシーナ、私が、手中にしたい、と思うのは、お前だけなのだ。

お前がいなくなつてしまつたなら、私には賤しい墓穴の他には、何も無くなつてしまうのだ。

頑固強情で、無情冷酷な心をば、お前は、依然として抱き続けよう、と思つているのかな？

とつくりと私を眺めてくれ、息子よ、この私が、冷たくなつてしまひ、

己が死によつて、長々と悲歎にくれる者となり、

下界で溜息を吐いている、辱められた恋人の亡霊宛らに、顔面蒼白

155

となつてゐるのを、お前が見たならば、

その時には、私の非運を招いた、その張本人を呪うことを覚えるがよい。

マツシ それは、何と恐ろしいことでしょうか、貴方が物語つていらつしやるそのことはね？

マシニ お前をば、幼少の頃より、私は、念入りに鍛えてきたのだ、厄介な戦闘の、骨の折れる訓練でね、

山の中や、不毛の砂漠で、お前を養育し、焼け焦げる程暑い高地を通つて、お前を太陽の傍迄も連れて行き、

荒野で、野猪を狩り立てる方法をお前に伝授してやつたし、幼いお前の手に、決死の武人の道を教え込んでやつたのだ。

私が、犇々とボツカー⁽¹⁶⁾に追跡されていて、急流の只中に、ざんぶと跳び込むのを余儀なくされた時、

お前も、私の後を追つて、跳び込んだのだつたな。

マツシ そうでしたな、殿。ですが、貴方は、川の浅瀬の渦巻いてゐる所を忘れていらつしやいましたぞ。

其処に嵌り込んで、私が、腕いた拳句、私の体力が尽きかけた時、貴方は、私の非運を打ち挫き、貴方の背中に、私を背負つて下さいましたな。

そんな風に、ヘレスポイント海峡をば、かのエウロパ⁽¹⁶⁾は、渡つて行つたのですな。

恐ろしさの余り、半ば死にかけ、神に貴負われて、ではありませんけれどもね。

マシニ だがな、我がマッシーナよ、更に、もう一つの危険があるのだ、

これ迄に、我々が経験し、如何な危険よりも、もつと恐ろしいもの

160

165

170

180

185

175

がな、

それは、つまり、性悪女のことだな。

マツシ 花が咲き乱れる草原で、タムバリンの音に合わせて、乃至は、千切れ雲宛らに、山の端で、女性達が

踊っているのを、今迄屢々見たことがあります、

今の今迄、彼女達が、小さな穴を穿つ程も怒鳴り散らす、などとは

思ったことはありません。

彼女達は、全身黒づくめの装いで、ぎよろつく目をし、

唇は分厚く、鼻はべちちゃんこで、えらく巨大な乳房をしている、と

分っていますからな、

マシニ お前は、未だ一度も、光り輝く宮廷に出入りしたことはなく、

女性の中でも、美しい方の人々を見たことも無かったのだな、

彼女達は、アフリカの諸宮殿に、ひっそりと隠れ住んでいて、有害な太陽から、その顔を匿しているのだ。

彼女達に較べたなら、あの連中は揃って、ぞっとする程厭な夜宛ら

に見えるのだが、

彼女達は、月神キュンティアの、白金色の弦月宛らに、けざやかに

光り輝いているのだな。

マツシ それ程素敵で美しく、白い肌の、

あの乙女達と知り合いになることが、罪になるものでしょうかな？

マシニ 彼女達を避けるのだ、マツシーナ、お前が、己が非運を避け

るようにな、

我々が、反感を抱いていること故、忌み嫌っている物みたいにな。

殺伐残酷な戦の、ありとあらゆる惨事も、

獅子も、虎も、それ程の狂暴さを秘めてはいないのだ。

前者は、怪物宛らだが、後者は、何処迄も丸つきり柔和穏健に見える

のだ。

誰が身を亡ぼしても、彼女が、依然としてにつこり微笑んでいない、

ということは、今迄ついぞなかったのだ。

彼女達は、すっかり欲びに包まれてるように見えても、内実は、

悲歎にくれているのだ。

稲妻宛らで、彼女達は、光り輝いていながらも、破壊するのだ。

横になって休むがよい、若者よ。美しく、肌の白い女性が、

お前が見ての通りの、こんな、現在の私を作る、酷い原因となった

のだぞ。

彼女の姿形が、暗黒の夜を支配する、あの天体(星) 達宛らに、け

ざやかで、

一点の曇りもなく、純真無垢に見えようとも、

彼女の心は、ムーア人の肌よりも黒い(凶悪な)のだな、

何しろ、詐欺ペテンが、美女と同居しているのだからな。

マツシ すると、美女の胸は、花の咲き乱れる土手に似ていますな、

巧みに、汚く醜い蛇を匿している訳ですからな。

マシニ 安全無事で、美しいものは、何もないのだ、如何な夥しい罪

悪にもね。

もしも、お前が、ああ！ 今迄私がやられていたように、女達から

利用されるとすれば、

それは、お前を陰鬱な(暗い)な気持にすることだろうて。私の物

語が、(女達から)語られるのを聞くではないぞ。

マツシ 女達は、もしも、私を利用するとすれば、私を年寄りに

(grey-haired) するでしょうか？

マシニ 嘗て、私には愛人がいたが、

彼女の為に、私は闘い、全世界を相手として、彼女の大義名分をば

擁護してやったものだ、小高くなった戦場でな、

如何程丁寧な微笑を顔に泛べ、欲びの余り、顔赧らめて、

205

200

195

190

225

220

215

210

私の大変な尽力をば、彼女が賞讃してくれたか、は、神々もご存知
だ。

して、彼女の手に口づけしよう、と私が低く身を屈めると、
私の唇に触れるように、と、彼女は、その手を挙げ、それを私の唇
に押し付けさせたのだ。

それは、全て、公然と行われたことなのだが、遠く離れた者の目か
ら見れば、

我々の欲びが、随分激しいもので、我々が、放縦気俵に愛し合つて
いるように映つた筈だ。

メナン 手前が、神聖なその絆の立会い人として、呼ばれて、

お傍におりましたことは、貴方も憶えておいでかも知れませぬが、

三度、我々は、婚姻神ヒュメナイオスを其処へと呼び出し、

シバ産⁽¹⁹⁾の、芳醇な香水で、その場の空気に香りをつけ、

神聖な誓約と、二人を結びつける祈願の言葉とを、口にしたのです
な。

マシニ あなたが、行つてしまつて、

唯一人、私だけが、魅力的な乙女と共に残されると、

何と凄まじい情火が、カッカと昂奮した私の神経を襲つたことだろ
う？

両腕を拡げて、至福を味わせてくれる人の許へと、私は駆け寄り、
死にゆく人宛らに、苦しみを覚えつつ、私は、彼女を抱きしめたの
だ。

光と熟宛らに、一体となつて、我々は、横たわり、
夜を祝福して、来るべき昼を呪つたのだ。

マツシ ところで、赫々たる武功をば、私が気に入っているのと同様、

その物語は、素敵に聞えますな。

その話が、一晚中物語られるなら、殿、星屑も、大空で光り輝きま

245

240

235

230

しようぞ、

マシニ 小鳥達が、曙の女神オーロラに呼びかけるや否や、

涼やかな彼女の目からは、さめざめと泪が流れ出たが、

それは、喘いでいる私の胸を伝わつて、滴り落ちたのだ。

彼女は、轟と私を抱きしめて、叫んだのだ、「如何しても、貴方は
行かなければならないの？」とね。

それから、雪宛らに白いその両腕を、私の首に巻きつけ、
溜息を吐きながら、言つた、「だけど、貴方は、永劫に私のものに
なつて下さるの？」

これから、貴方は、誠実にして下さるかしら？」とな——それから、

我々の唇は、合わさつたのだ。

マツシ 優しく、可憐な心の持主よ！

マシニ 彼女の最後の言葉はな、

「お聞き下さい、神々よ、この私は、決して幸せには恵まれませぬ
よう、

もしも、マシニツサ様が、私のこの胸にとつて、

こよなく愛しく、優しく、永劫に渝わらぬ客人ではなくなつたなら」

というものだったのだ。

しかし、彼女は、美しく、優しく男を惑わす、その彼女は、

自分の誓言をば、何もかも、さらりの忘れてしまつて、

カルタゴの為、私が、戦の鬨の聲に従っている間に、
己が軀を、他の男の両腕に委ねてしまつたのだ。

ラエリウス、及び、ヴァットロ、登場。

ラエリ 到頭、その男は見つかったのです。立ち上がるのです、マシ

ニツサ王、お立ち上がり下さい。

260

255

250

貴方のお目の辺りに漂っている、その黒雲を払い落として下さい。栄光が、目に見えるようになって、その魅力で、我々を口説いており、戦という新たな嵐が、霞宛らに、我々の周りに降り下っているのですな。

265

ヴァツ 本国では、どっしりとした楯の上に座していた復讐の女神は、今や、それを持ち上げて、戦場の隅から隅迄も巡回しているのです。日本もの、その針金の咎を残らず持って、彼女は、やって来て、絶望している君主達をば、その墓穴へと追い立てているのですな。ラエリ シファックスと、アスドルバルとは、その軍勢を併せ、(磨き上げた)その武器武器で、山々や谿間は、キラ／＼と光り輝いているのです。

270

おや、一体如何な、世にも稀な女性の魅力が、貴方のお心を惹きつけているのですかな？
気高い貴方の血は、血管の中で、凍りついてしまったのですか、塵埃に塗れた戦場から、こうして、貴方が、引き退って来られて、涼しげな木蔭を捜し求められる、ということはね、全世界が、カッカと昂奮しているのですぞ？

275

ヴァツ 国王達は、その絹の衣裳を脱ぎ捨て、甲冑が、その衣裳となるのですな、
リュートの代わりに、甲高い音色の喇叭が、全世界を魅了しているのですな、
しかし、貴方は、名譽面目を競い合う、その大レースから抜け出し、折角落ちてくる棕櫚の枝葉も振り払い、誘惑する月桂樹をも避けておいでなのですな。
一体何故、貴方は、ソフォニスバが喪われたことを悲しみ嘆いてい

280

らっしゃるのですかな、
彼女を享樂しているシファックスが、「さあ、来い！」と叫んで、挑戦しているというのにね。

マシニ ふん！ あの下劣な篡奪者が、己が無頼の家来達を引き連れることなく、

285

この私と、敢て一騎打ちしようという勇氣があるのだつたらな！
ラエリ もしも、貴方が、それ程ひっそりと、此処で死なれるようなことになったなら、丸で、
宿命が、貴方のお用い存じもせぬ俣で、貴方がお斃れになる、ということになりませぬ。

して、もしも、貴方が、逝ってしまったのなら、非難する世評は申しませぬ。

あの人の玉の緒は、女の手で紡がれたのだ、とね。
だが、ヴァツロ、我々は、考え違いをしているのだな。これは、彼(マシニツサ王)ではなく、

290

これは、誰か道徳に夢中になっている人間で、
誰か学問に励んでいる若者で、天空を検分しており、
無味乾燥な学問に凝って、生涯を浪費しているのだよ。

マシニ 目覚めるがいい！ お前は、今迄、一体何処に行っていたのだ、眠たげな我が魂よ、

忘却のレテ河に浸っていたのか、さもなくば、極地の近くで、寒さに凍えていたのかな？

295

私には、今や、それが、麻痺した私の四肢を活気づけ、
私の気魄が、勢いよく跳び出して、矢のように飛んで行き、更に高く上昇して行くのが感じられるのだ、
燃え上がる火から撒き散らされる、火花宛らにな、
恋の企みは、恥ずべき、腹黒いものであり、

盲滅法に、彼は、狙いをつけ、その標的という標的は悉く、闇の中
なのだ、

白昼宛らに 彼を照らし出して、徹底的に彼を射抜いてやろう。そ
うしてやるぞ。

我が名誉面目を癒すべく、私は、我が恋人を殺してやろう。

我と我が手で、彼女を殺し、彼女の魅力を、余す所なく、ずたずた
に切り刻んでやるぞ。

今、戦が行われているのだったな。何と凄まじく、それは、鳴り轟
いていることだろう！ さあ、彼方へ行つて、戦闘準備だ、戦闘

準備だぞ！

高名なスキピオが呼び出した所へ、何処へでも、出向いてやろうぞ。

この私は、傲慢不遜なカルタゴの城壁をば、真つ先かけて攀じ登つ
てやるぞ。

我々の栄光という翼を生やして、さあ、我が友人味方達よ、飛んで
行こうぞ、

雄々しく敵を打ち破るか、さもなければ、雄々しくも死を遂げる為
に。

ラエリ 貴方ご自身に相応しい話し方をなさいましたな、こんな風
に、我々は、敬意を表しますぞ、

古昔、トロイアが一敗地に塗れた時、かのアキレスは、そんな勇姿
を見せていたのだ、と申し上げましてね。

ヴァツ 猛々しくも堂々と、若き軍神マルス宛らに、貴方は、立ち開
かっっておられますな。

そんな姿形の持主こそ、このアフリカに号令を下すに相応しい方な
のですぞ。

マシニ 大きな期待に胸膨らませた恋人達が、わくわくと昂奮する如
く、

310

305

300

私は、心の底から、情熱の全てを戦闘に傾けていて、
神々宛らに、素早く、全速力で風を追い越し、

その日一番の駿馬をも、後に残してしまふような勢いで突つ走るの
だ。

だが、待てよ、私は、未だに、心安らかではないようだな。

人を殺すという事で、一体如何な、真の喜びが味わえるものか
な？

ラエリ ひ弱な王侯よ！ 彼の行動という行動は、何と浮き足立つて
いることだろう、

恋という狂乱激動の海の中で、激情によつて、揉みくちやにされて
ね？

マシニ だが、戦は、罪悪を収縮するし、
勇者は、多勢の人の命が、滅ぼされたなら、嘆き悲しむものだ。

恋は、慈悲深く、若々しい君主みたいなものであり、
人の血を流さぬことは、強者をも、女々しくするのだが、

戦は、暴君宛らに、更に酷く、我々を苦しめ悩ませ、
恋をしたが故に、惻隠の情を抱いたことのあるような人を、悲嘆に

くれさせるのだな。(一同、退場)

325

320

315

二幕一場

スキピオ、マシニツサ王、メナンダー、ラエリウス、及び
ヴァット、登場。

スキピ 　ハンニバルの偵察兵達、彼等は、陣営を檢分したのかな？

ラエリ 　閣下のご意向は、きつちりと遵守されましたぞ。

スキピ 　勇猛なる我が友人味方達よ、私は、聞き及んでおるし、聞い

たが故に、悲しんでもおるのだ、

あなたが、(男を縛する) ソフォニスバの鉄鎖に掛けられている、
ということをね。

栄光の流派で、あなたは、いの一の名声を博し、

世評名声という、仄暗く、謎めいた長談義に長けており、

偉大強大な故人達について語られた、

あの快楽に倦き疲れた人々の話を読んでいた筈なのだが、

そんな柔弱な行動によって、あなたは、あの高潔な

資質を押し流した挙句、あなたの名声を喪つてしまうことだろう。

あなたが得ていた、ありとあらゆる名譽面目をば、忠実に守ろうと

はせず、

恋人が流す泪で我を忘れ、美女に微笑みかけられると、夢中になつ

てしまうとはな。

マシニ 　私はですな、貴方、貴方の偉大な功業に教えられて、

あの美女をば、苦惱する私の想いから追ひ払おう、と努めたのです。

ですが、それと同様、私は、天に託したいのです、戦を遂行し、

より意地の悪い(旋毛曲りの)、我々の運星の影響を消すことをね。

宿命的な火災を携えた、あの連中宛らに、彼女が、私の行く道を照

らし、

更に遠く迄も彷徨い行けるように、と、私を導いてくれるのですな。

スキピ 　それでは、あなたが、か弱い、となれば、私は、憤慨せざる
をえないし、

強心剤が効かぬ、となれば、腐食剤を使わぬ訳にはいかん。

私に対しては、慇懃丁寧な所を見せられるが宜しい、何しろ、あん

た自身は、賢明な判断が出来るだろうからな。

私は、あなたには、友情を抱いておる、それ故、あなたに忠言勧告
を呈するのだからな。

マシニ 　閣下、貴方は、私に、ソフォニスバを愛してはいけない、と

仰有つておられるのですかな？

スキピ 　彼女は、このローマの仇敵であることとて、彼女相手の

如何な約定も、私は、認める訳にはいかないのだ。それ故、遅滞な

く彼女を振り捨てられるがよい、

さもなくば、名譽面目に対して、あなたは、罪を犯すことになるぞ。

マシニ 　すると、貴方は、この私を生かしておきたい、とお考えなの

ですかな？

スキピ 　彼女が、死んでしまったならばね。

一体何故、あなたは、彼女が生きていることを望まなければいけな

いのかね、あなたと、ローマとを、共に

裏切つた、女の生をね？　私が工作し、彼女に

狡猾な弁舌を振るわせて、シファックスが、カルタゴに味方する

ように仕向けたのだ。

神かけて、私は、誓うぞ、もしも、彼女が、私の捕囚だとしたなら、

私は、彼女を、ローマの仇敵として取り扱うぞ、とな。

マシニ 　貴方は、私に、彼女を振り捨てさせながら、生かしておきた

い、と仰有るのですかな？　貴方が着用しておいで、

20

25

30

その肉体をば、貴方が、お捨てになれるとしましても、依然として、渝らぬ俣でいらつしやれるものか否か、

知りたいのですな。此処を、私のこの胸を、貴方の劍が刺し貫いたのです。して、残虐なその行為が行われた時、

貴方の鋼鉄の刃が、私の心の臓から迸り出る血で、湯気を立てている時、

私が、今迄そうだったように、健やかになれ、と私に言いつけられるようなのですな。

スキピ どうも、あんたは、私の意志に逆らおう、という決意を固めたようだな。

だが、友人味方の言葉をば、私は、何も悪意をもつて解釈する心算はないのだ。

マシニ おお、それでは、もそつと我慢して下さい、私に話させて下さい。

何か捌け口がなければ、悩み苦しむ私の心は、張り裂けてしまうでしょうからな。

お命、貴方のお命をば、この私が助けて差上げたのは、友人味方としてであり、

貴方が、国王以上の存在で、ローマの執政官で、広く知れ互つたスキピオ様であり、戦の神様でもあられるからではないのです。

如何な勇者、豪胆の士だろうと、その愛人が口にする、不法不当な言葉をば、辛抱強く聞けるものではないかな？

貴方の件では、誰か別の者を出頭させて、貴方が口にされた、お言葉の正当性をば、証明なさるが宜しい。

不死不滅の神々にかけて、私は、其奴を打ち殺してやりますぞ。

35

ラエリ 陛下。(マシニツサ王が進み出ると、ラエリウスは、王の劍に手をかける)

スキピ 寛大で、太つ肚なあんたの気性をな、ラエリウスよ、ぐつと抑えるがよい。

彼は、もつと冷静になろうとして、却つて、いよいよ、躍起となることだろう。

私の美德廉潔は、ありとあらゆる激情の嵐を知つておるし、その風や、驚くべき干満をも試してきたのだ。

あれ程小さな要請をも、あんたが拒否出来るからには、もつと大きな証拠があるとなつたら、一体如何な風に、あんたの友情は遁げ出すことだろうか？

マシニ 閣下、この私を、何か違つたやり方でお試し下さりさえすれば、

神かけて、如何程欣然と、私は、ご命令に従うことでしょうか？血が、優しい温もりを、この手足に与えてくれている間、

私が、槍を振り翳し、又は、劍を揮るつていられる間は、

ずつと、貴方は、このマシニツサの主君でいらつしやることになり

ますぞ。

進んで行つて、茫洋たる大洋中を彷徨い、身の毛もよだつ怪物達が、恐ろしいその土地を守っている

何処か荒れ果てた岸辺へと航行して行き、地獄へと、私が、沈み行こうとも、貴方のご命令とあらば、人に踏みしめられたこともない砂浜に、この軀を投げ出しましょうぞ、

貴方は、カルタゴ人というカルタゴ人をば、根こそぎ殺させたい、とお思いなのでしょうが、

それとも、彼等の都市の建物群が引き倒されて、平らにならされて

40

45

50

55

60

65

70

しまうのを見たい、とお考えなのですか？

欲び勇み、微力を尽くして、私はその仕事を仕上げます故、

私の王冠に相応しいソフォニスバだけ、私は、頂戴したいものですな。

スキピ 外敵征服が最早行われなくなったのは、

このローマのどの護民官もが、今迄、行った例がなかったのと同じことだな。

全軍中限なく捜して、見つけるがいい、

もしも、私が言いつけたなら、砲火という威力を敢て避け、

断崖から、如何しても飛び降りようとはせぬような兵士を、一人で

もね。

私が命令したとして、ラエリウスよ、あなたは、死ぬことを

拒否するだろうか？

ラエリ 帝国に尽す我が運命をば、手前は、取り逃がしたくはありません。

せんな。

背方のご命令とあらば、神殿寺院や、聖堂に火を放ち、

その神々を分捕り、其処の彫像や、祭壇を破壊し、

私が憤激している様子を見せて、彼等に、もつと貴方を畏れさせて

やりますぞ、

彼等の怒号という怒号が、一斉に鳴り轟いている時、私が彼等を惧

れているよりもね。

スキピ 諸王国を征服し、王笏を踏み躪るなどということは、

今は亡き、偉大な英雄達の猿真似にしか過ぎぬ、

たとえ、あなたが、己が武力をば、遙か世界の果て迄も及ぼしたに

もせよ、

アレクサンドロス大王は、同じ位遠く迄も、睨みを利かしたことで

85

だが、もしも、制御出来ぬ程の情熱をば、あなたが、縛りつけ、

あなたの心中の、恥ずべき熱情を抑えつけることが出来るなら、

あなたの名声は、東方のありとあらゆる美女達をば

無視した俣でいられた、傲岸不遜なあの征服者の名声と、互角に競

い合えることだろう。

もしも、あなたが、依然として、彼女の魅力を信頼しよう、と決意

しているとしたなら、

世間は、あなたのことを、不法不当な向こう見ず、と呼ぶだろうし、

あなたが、身を滅ぼしたなら、「彼は、情欲の所為で、死んでしまっ

たのだ」と言うことだろうな。

マシニ 貴方は、この私が身に覚えのない罪で、私を糾弾しておられ

ますな。

ですが、余りにも酷く私を追い立てないで下さいよ、何しろ、私が、

激昂して、あらゆる限界を超える程迄も、当然の復讐を追求し、

憤激する余りに、目が眩んで、貴方目がけて跳びかかるかも知れま

せんからな。

スキピ (ラエリウスに) 彼から手を離すがいい——神々にかけて、

如何な酷いあなたの脅しをも、私は、敢て撥ねつけてやるぞ。

瘦せた片腕如き、ローマの執政官たる者は、怖気を振るう訳にはい

かんからな、

この私は、あなたよりも高所に据えつけられた、恒星宛らに、あ

たの上で光り輝いているのだ。

その私に、あなたは、手が届かぬにもせよ、感嘆することは出来る

筈だな。

マシニ むしろ、流星宛らに、貴方は、偽りの栄光を帯びておいで

すが、

忽ち消えてしまうその火炎は、地上の下等な蒸気が作り出したもの

105

80

75

100

95

90

ですが、
しかし、空想に想い泛べた炎で、貴方が、空を充たしていらつしやるとなれば、

唯一人の王侯と雖も、恐ろしげな貴方のご様子を見せられたとて、死ぬようなことはございますまい。

スキピ 何とどえらい誤りを、私は、犯していたことか？ あんたを試すのは、もう終りだ。

おやまあ！ こんな人物を、今迄、私は、我が友人味方と呼んでいたとはな！

一体如何して、私の心が、それ程粗雑なものと思透かされるようなことがありえたものかな？

それでは、全人類の中から、こともあろうに、あんたが選ばれたのだ、

おお、いとも恩知らずで、怒りつばい、野蛮残忍な国王よ！如何な幸せも、今迄このアフリカから生れ出したことはなかったのだ。

この私は、その為に、ローマでの、どの人々との友情交友も遠ざけ、あの野蛮残忍な（国王の）武力に、保護を求めたことになるのか？戦の重苦しい心労に圧倒されていた時、

私の心労苦悩は悉く、あの不服そうな、（あんたの）胸に頼つていたし、

如何な請願訴願をも受け付けず、指揮支配権をも認めなかったのだ、

あんたマシニッサの手から提示されたものを除いてはな。一体如何な勝利をば、今迄、私は、目論んだことがあったかどうか、あんたの栄光が、私の栄光に劣らず、光り輝かないようなものをね？

120

115

110

しかし、女故に、それも、不実な女の為に、あんたの名声、あんたの信義誠実、及び、友情交友をも、あんたは、捨ててしまおう、というのだな。

お偉方には、絶えず寵臣達に気を付けさせるがいい、我々をこよなく騙し欺くのだからな、こよなく信頼されている者達こそがね、（執政官、顔を背ける）

マシニ お待ち下さい、執政官殿、お待ちになつて下さい、我が友人味方、高潔な我がご主君よ、

それでは、貴方は、軽率な、たった一言の所為で、私を振り捨てられる、と仰有るのですか？

永劫にこの私をば見捨てられるのですかな？ おお、貴方は、貴方の麾下の、

このマシニッサに目をかけて下さったことは、今迄、一度もなかったのです、これ程迄も、そうしてやろう、というお気持ちになられる貴方はね。

さあ、もしも、その気になられるのなら、恩知らずの、この国王をお捨て下さい、

野卑野蛮で、粗雑な、この人間をね。私が、激情に駆られた余りに、行つたことは、何事によらず、赦されて然るべきではございませぬか、

何しろ、正直申して、貴方は、私にとつては、神に等しいお方なのですからな。

しかし、もつと優しく、親切な為され様さまだつたのではありませんか、

私の心中の嵐には出くわさなかったのだ、というふりをして下さつた方がね。
スキピ だが、今度の、我々の間の仲違いで、あんたマシニッサが、

135

130

125

私の命を狙うなんてことが、一体ありえたものかな？

マシニ 私に死罪を宣告し、呪うべきこの両手を切り落とし、私に、縄目の恥辱を味わわせて、シファックスの許へと護送して下

さい、

私が、ありとあらゆる陰險陰湿な責め苦をも耐え忍んで、死後には、最早、非難譴責の言葉を聞かずとも済むように、ですな。

スキピ あなた、その高潔な返答のお蔭で、この私は、

永劫に、あなたのものになったぞ——なあ、教えてくれ、私は、今、
(あなたを) 咎めだてしているのだろうか？

これが、非難譴責の言葉だろうか？

マシニ おお、天上の神々よ、下界を見下ろされ、

不朽不変の貴方がたの王座にかけて、私が誓うのをお聞き下さい。

貴方がたに生き写しの、このお方が命じられることは何なりと、たとえ、ソフォニスバが、震える私の手から腕ぎ放されましようとも、

私は、それに従いますぞ、ね——さもなくば、立ち所に、災いをば、

この私に降り下し給え！

スキピ あなたへの最初の試練として、早速キルタへと急ぎ赴き、

その城門にて、破誓したシファックスに挑戦してやるがよい。

あなたが指揮するなら、我が軍は、勝利を取めるに違いないのだ。陰険に立ち回るその才覚が、ありとあらゆる彼の心労を作り出した、

彼の妻が中心になって、制圧してやろう、と躍起になっており、

彼女は、快い悲歎を抱いて、戦を再開したのだな。

マシニ 私の縁戚のこの若者をば、私は、人質として残しておきますぞ。

私の一切合財を、私が、心底掌中の珠と慈しんでいる、このお気に

入りを、お受け取り下さい。

この私が、戦で裏切るか、誠実を尽すか、の何れかに応じて、公正なる天は、彼と私の双方に対して、尽してくれましようぞ。

マツシ ああ！ もしも、この私が、貴方が心から愛しい、と思つて

下さるお気に入りでしたなら、

一体如何して、貴方は、私をば、これ程寄る辺ない状態で、後に残しておいでになれるものでしょうか？

私と一緒に連れ下さい、さもなくば、あれ程情け深く、優しい、
という風を

背方に装わせたのは、単なる手練手管に過ぎなかったのだ、と私は

思うでしょうな。

マシニ さあ、ありとあらゆる神々が、挙つて、お前の尊い命をお守

り下さるように！

私の目に宿つたこの泪は、間違いなく、何か重大なことの前兆となつてに違いない、

私は、涙を流すことに慣れてはいませんでしたからな。

スキピ 又、今、涙を流してもいけない、という訳だな。

あなたの要請で、我々は、ザーマへと出かけるぞ、

此処よりバグラードへと、我が軍を率いて行くのだ。

死に物狂いのハンニバル相手に、我が軍の兵力を試し、高名なあの征服者をば、ずつと畏敬させておくべく、

ユピテルの神殿で、彼等は、支配するということについて、語り

合つたのだな。

マシニ 私の血は、我が血管の中で沸き返り、火が点いているのです。

そんな言葉、それ程の勇氣は、死者をも甦らせましよう。

左様、閣下、我々は、ハンニバルを相手として、闘い、

血塗れの精算へと、彼が自慢の剛勇を召喚してやりましようぞ。

155

150

145

140

175

170

165

160

スキピ 巨大で、建てつけの悪い、何かの塔宛らに、えらく丈高く彼

は伸びたので、

彼という建物の、大理石造りの（冷酷無慈悲な）正面は、突風が吹

いてくる度毎に、ユラ／＼と揺らいでいるのだな。

マシニ 雷電宛らに、彼の王冠に狙いをつけた、我々の武技武力は、

我々が憤激する俛に、力一杯投げつけられて、一斉に突進し、

一瞬にして、彼の栄光をば、転がり落とさせてしまいましようぞ、

（マッシーナ、独り残る）

マツシ 私程不運不幸な若者が、今迄いたものだろうか？

だが、私は、彼に復讐してから、死んでやるぞ。

多分、自分が起したこの戦で、私を喪つてしまうことを、彼は懼れ

ているのだろう、

丸で、私の靈魂が、私の年齢よりも生き延びることはない、とでも

いうかのようにね。

ロザリンド、登場。

ロザリ 苦心慘澹して、私は、護民官の手から逃れて来たのだ、

だけど、私の縄目を断ち切り、通行許可証を付けて、

私を送り返してくれなければいけないのは、執政官様なのだ——其

処にいるのは、一体何方なの？

貴方は、如何いうお方ですか？

マツシ 先ず、貴女が、如何いうお方なのか、を教えてください。

それに、如何して、貴女が、そんなに、この世の女性とも思われぬ

程にも、美しくなられたたのか、をもね。

貴女が、それ程生き生きと、鮮かな顔色に、

薔薇の紅、百合の純白を思わせる顔色になられたのは、一体何の所

190

為ですか？

ロザリ 貴方は、今迄一度も、こんな風になられたことはございませ

んの？

マツシ 私は、今迄一度も、自分の血の中に、そんな瘡や、

熱病の病根が潜んでいる、などと気付いたことはありませんぞ。

ロザリ 私は、もう失礼致しますわ。

マツシ たとえ、貴女が、そうしたい、と思われても、それは叶いま

すまい、

その位なら、貴女が、ご自分の血を捨てら（放血さ）れるとしても、

同じ位業に出来ずからな。

あんな風に、顔赧らめつつ、私は、貴女の周りを這い回り続け、

うんざりするような想いを、密やかな楽しみで充たす心算ですぞ。

ロザリ 貴方が、手に入れたい、と思われるのは、一体何のですの？

マツシ ああ！ 私には、分かりませんな。

世の中には、造化が教えてはくれぬものが、何かあるのです。

美しい旋律を持った調べを聞いた時のように、貴女が、話をされる

時には、何時でも、

私の血管の中を、何か、さら／＼、ちよろ／＼と流れるものがある

が、

水銀宛らに、それは、酷く冷たく、素早く流れるので、

その時、私の双の目は、最後に一目見ようとするかのように、きら

りと瞬いたのですな。

ロザリ それは、恋みたいに見えるけれど、それが生れる時には、側

隠の情（の持主）では、

殆ど享受することの出来ない激情を滅ぼしてしまうのですわ。

マツシ 多分、貴女は、この私が、平民階級の生まれなのだ、とお考

えなのでしょうが、

210

185

180

200

205

195

高貴な血が、私の高い家柄を飾ってくれているのです。
ああ！ それでは、その罪のない炎を消さないで下さい。

何しろ、貴女の眸から、ずき／＼と疼くような痛みが飛んで来たのですからな。

□ザリ ご自分の燃えるような情熱を、貴方は、申し立てておられますけれど、無駄なことすわ。

この碧は、難攻不落故、貴方の攻囲軍を解散して下さい。
如何な軍勢も、如何な戦術も、外郭の堡壘を、ほんのちよつぱり陥れることさえ出来ませんわ。

貴方がお相手なさるには強大過ぎる人が、只一人、この碧に入城したことがあるのです。

それは、この地上で、傲慢不遜を極め、剛勇無比で、積極果敢な人物でもあり、

神々の血を引いた生まれなのですわ。

マツシ それでは、不死不滅の、神々の一族に、その人物を連ならせておいて、

貴女は、人間の血縁関係に連なつた方がましですな。
その上、自分が信仰する神の他に、一体誰が知っているものでしょうか。

神々は、時として、えらく過激で、熱狂的になるものですからな、
貴女が恋をするようになったなら、偶々むつとして、不機嫌になり、
憤りに任せて、貴女に向つて、散々怒鳴り散らすかも知れぬ、とい

うことをね？

□ザリ 成る程確かに、戦に際しては、いとも恐ろしげに彼は見え、
滅法残酷無慈悲で、華々しくなり、酷い危険にも耐えているのです。

貴方に楽しんで頂く為ではないけれど、偉大で愛すべき人々の名を

ば、貴方が

230

洗い深い挙げてしまったなら、ハンニバルのことを想い出して下さいな。

マツシ それは、一体有り得ることなのですか？
(相手が)老齢になつたなら、美貌の持主は、愛すべき如何なものでも見つけられるものでしょうか？

栄光を博するという夢想が、目覚めつつある若者の願望を充すことが出来るのですかな？

□ザリ たとえ、彼の血が、凍(氷)結してゆく潮流がさしてくるように、流れているにもせよ、

彼の頭髮が、アルプス連峰の山頂の雪よりも白くとも、
私の若さも、彼の老齢と一緒にたになり、結局は同じもの、という

ことになつてしまふでしょうね。

マツシ 貴女が、今迄口にされたことは、冗談半分に話されたものだ、
と、私には分っていますぞ、

貴女は、(私のような)こんな萎びた樅の木を相手に、一体如何しよう、と仰有るのですかな？

若々しく、気持のいい蔦の木が、貴女の直ぐ傍に生えていて、
その房という房諸共に、貴女の支配に服しようというのね。

□ザリ 若々しさと、美貌の持主に授けられる、名譽面目の方が、私
は好きですわ。

戦で無比の手腕を發揮し、剛勇この上ない武人こそ、この私には相
応しいのですわ。

そして、彼程偉大な人物は、他に、誰も世に知られてはいないこと
故、

彼以外の誰も、私の愛情を左右する主君になつて貰う心算はありま
せんわ。

もつと儂い歡喜をば、他の娘達には享受させてやるがいい、

245

束の間の、あの夜の快楽をね。

「ただ、私は、もつと永劫不変の幸せを志しますわ、つまり、華々しい、我が意中の武人の心の中で、私は光り輝き、私の名を、高貴な彼の墓に、碑銘として、彫り刻ませるので、

「これぞ、この女こそ、かの英雄ハンニバルをも、己が擒とせし女性なりき」という碑銘をね。

マツシ 私は、如何な安楽という夜明けをも見つけることは出来ませんが、

しかし、絶望的なこの恋に専心し、王権の持主なり、という如何な考えをも抛つて、

世界中を、貴女の小姓として、お仕えして廻りますぞ。

何かと心を砕いて、骨を折るにも拘らず、唯一度の口付けをも懇願

する心算はありませんぞ、

それは、偉大強大な、貴女の武人をば、辱めることになりますからな。

優しげな眼差しで、私を眺めて下さい、すれば、私は、その幸せを

有難く思いますからな、

野心満々たる者が、胸中に抱くような、希望にもましてね。

ロザリ それじゃ、暫しの間、時機を待って下さい、と貴方が決心な

さっているからには、

貴方の話の皮切りとして、早速、私を執政官殿に引き合わせて下さ

い、

私の美貌は、彗星宛らに、諸国民を統べる、

穩健な君主たるあの人物の目を覚させて、仰天させることでしよう、

私は、割れ鐘のような声で、彼の耳に悲鳴り込み、彼の目を照らし

出してやる心算ですからね。(一同、退場)

260

255

250

二幕二場

カルタゴ軍の陣営。ハンニバル、己が幕舎にて、灯りを点した俵、テーブルに就いている姿が見られる。

ハンニ 將軍の胸を苦しめ、その脳味噌に割れそうな痛みを与える、

心労労苦や、愚図愚図と長引く苦痛は、何と酷いものだろうか！

アルゴスは、百もの目を持つていたというのに、私には、一つきり

ないが、

しかし、日中ずつと、それは、太陽宛らに、用心深く、

一晩中、それは、月宛らに、油断がないのだ。

この私は、一体何時、眠ればいいのか、雑音騒音や、(武人たる)

仕事から解放されてな？

辺りは、シーンと静かになつたが、(武人たる) 仕事が、その後

続いているのだ。

ニンフ達が、森の中で、彼(ジョーヴ)の神性を崇めよう、と跪い

ている時、

美貌(の持主)をば、ジョーヴ神は、天の高塔から引つ張り出すこ

とが出来たのだが、

それ程、彼は、全能の力にもまして、享樂を好んだのだ。

彼の血の奥底には、密やかに伝染性の病原体が流れていて、

それが、あの途方もない不滅不死の人間である、彼の子息の

大アルキデース(ヘラクレス)を汚染したのだが、彼は、(それを揮つ

て) 諸国を侵略出来た、

あの巨大な棍棒から、糸取り棒を作つたのだ。

ああ、彼が、その愛人の姿見鏡に、己が姿を映してみ、優しげな

10

5

容貌を考え出し、

神宛らの、その目の栄光を減らし抑えて、

力強いその声をば、優しい叫びに変えることが出来ればいいのに！

神々自身も、神宛らの人間達も、今迄に恋をしたことがあること故、

一体何故、この私が、美女の魅力に心を動かしてはいけないという

ことがあるのか？

最高位のジョーヴ神でさえ、恋の袋小路を踏み歩いたことがあるの

だから、

それなら、このハンニバルも、恋をし続けて、神の真似をしていて

もいい筈だな。

ボミルカー、登場。

ボミルカーが、此処にやって来たのか？ こうも出し抜けに戻って

来たとはな？

あんたは、丸で、これ迄自分が旅してきたことをば、嘆き悲しんで

いたかのような顔つきをしておるな。

ボミル 閣下、我々は、発見されてしまいましたぞ。

ハンニ おや！ それは、一体如何したことだ？

あんたが喪った自由が、又ぞろ授けられた、とでもいうのかな？

ボミル あの太った肚の執政官殿は、我々が何者なのか、を先刻ご承知

の上で、

我々の懼れ心を消すように、と我々に言いつけられたのです。

それから、部下の士官達に、厳命を下されました、

どの隊をも、我々に眺めさせるように、とね。

ですが、あんな剛勇極まる兵士達と、あれ程厳格至極な規律訓練と

は、いやはや、全く驚き入ったものですか！

15

ハンニ あんたはな、ボミルカー、丸で、私の命令を知らなかったよ

うな話しぶりだな。

ボミル 閣下、お許しの程を、私は、この目で、未だ一度たりと、

あんな雄々しい仇敵を見たことはなかった、と、もしも、私が申し

上げるとしたらね。

我々を意気消沈させることがより尠なそう、その事実を我々が見

てしまうと、

彼は、鷹揚に、陣営からの退出を我々に許可してくれたのでありま

す。

ハンニ その礼儀正しい剛勇は、大なる感謝の念を私に抱かせたので

憤激が半減した俛、私は、戦闘へと出かけることになろう。

疑惑が此処へと入って来るのだ、未だ一度も、この胸が味わたつたこ

とのないような疑惑がね。

疑惑は、懸念恐怖を生み、その懸念恐怖は、私の勇気をば、メロメ

ロに溶かし蕩かしてしまうのだ。

だが、私の恋人についてはな、あんたは、何も言わなかつたな。

彼女は、生きているのか？ 如何程、私は、その返事を懼れている

ことか！

さもなくば、彼女が死ねるなんてことが、一体有り得るものかな？

ボミル その搜索で、我々は、知恵のありつたけを振り絞って、やつ

てみましたが、

我々は、あの華々しい乙女については、何も聞き込めはしませんで

したな。

ハンニ 多分、彼が心から節制に励んでいるのは、世間周知のこと故、

何者も擒にせずにはおかぬ彼女の目から、傷を負うやも知れんな。

して、今や、彼は、彼女を身近な所に置いて置いているのだ。もしも、彼

が、敢てそうしているとすれば、

20

35

40

45

30

25

砲火を浴びせ、武力を揮つて、我々は、戦を続（遂）行してやろう。

そうだ、我々は、早速、我々の部隊を合流させよう。

全世界が、賭けられているのだ、彼女をば、彼のものの俵としてお

くか、さもなくば、我がものとしてやろうぞ。

ボミル 神々が賭けた大金の目をば、大胆不敵に賽子（さいご）でお振り出し下

さい。

十万名もの軍勢が、早速にも集結しますぞ、

貴方のお味方をして、己が武運のありつたけを賭けよう、という連

中がね。

マハーバル、登場。

マハー 出てお出でになって下さい、閣下、貴方の幕舎から、急いで

ね。ご覧頂きたいのです、

激しい気性の者の心胆を寒からしめ、豪胆な者の気力をも挫くよう

な光景を。

甲高い喇叭の響きが、天国の弓形門（アキメ）を通して轟き渡り、

宣戦が布告され、殺伐とした戦闘開始の合図が下されたのです。

二つの太陽が、きらびやかな、その戦車の窓掛けを巻き上げ、

振り翳した雷霆を、互いに投げつけ合っているのです。

紅の雷電が、大気を傷つけながら、血の色の空の中を、

燃え立つが如く、ギラ／＼と光つて突進し、尖った無数の破片を飛

ばしており、

不死不滅の靈魂達は、ぼつたりと倒れ伏して、死んでしまったよう

に見えるのです。

けざやかで、楽しげな、天国の戦士達の軍勢が、

任命されて、敵に立ち向かい、闘いに突入する準備おさおさ怠りな

いのです。

金色燦然たる武装を整えて、彼等の卓越した指導者達は、現われる

のですが、

ダイヤモンドを鏤めた兜と楯とを身に着け、

高価な星飾りを付けた槍を、彼等は携えているのであります。

ハンニ ありとあらゆるものの終焉が、間違ひなく、近づいておるな。

マハー 虚空の中を、投げ槍がピューツと斜（はす）に飛び交ひ、

浅黒く日焼けした悪鬼達は、中窪の雲を掴み、

長い雷電を使つて、彼等は、ど／＼と轟音をたてているのです。

彼等の喇叭には、悉く、太陽の光線が嵌め込まれ、

其処では、火を吐くような、激しい息の所為で、物凄い轟音がたて

られているのです。

山々が、大地の胎の中に埋め込まれてしまい、

自分達が始めて誕生させて貰った所に、彼等は、墓穴を見つけたの

です。

我々の家庭の守り神達は、突つ立った俵、汗を流しており、貴方方

が供えた

花冠は、人が触れもせぬのに、彼等の顛顛から滑り落ちてしまうの

ですな。

つい今し方、その顎をすっかり血塗れにした、一頭の狼が、

その傍には、口から泡を吹いている、残忍獠猛な、一頭の野猪が付

き従つて、

真つ向から貴軍の前哨地点に立ち向かい、其処で、殺戮が始まりま

したが、

全軍の中を駆けずり回つて、流血につくづく飽きてしまう迄、

彼等は、その殺戮の手を休めなかつたが、それから、その怪物共は、

遁走して、

姿を消してしまい、仄暗い森の中に潜み匿れたのです。

ハンニ 空中そらじゅうを充たしている、あの物凄い天変地異をば、遙かに眺められる場所へと案内して欲しいものだ。

空中に泛んでいる、怒れるあの悪鬼達の気持を宥めるべく、

我々の神官達に、犠牲いけにえを捧げる準備をするよう、命じてくれ。(一同、退場)

二幕三場

幕が引き開けられると、血に染まった空、二つの太陽、闘っている妖精達の姿が見られ、矢が、あちこち空中を飛び交っている。降服しようとしている敗者達の叫び声、及び、「カルタゴが、陥落したぞ、カルタゴが、……」という喚声が聞えてくる。

ハンニバル、マハーバル、及び、ボミルカー、再び登場。

ハンニ あんな奇怪極まる者達の姿をば、我々に見せつけたりして、神々は、一体如何いとお心算なのか？

それに、怒らせられた訳でもないのに、何故、彼等は、こんな風を惹き起こしているのかな？

マハー あんな物凄い天変地異が現われる時には、

何処かの国の破滅が、間違いなく、間近に迫っているのですな。

我が軍の將軍は、憤激しておられ、怒れるその目からは、火矢が射放たれています、

高潔なその憤りが、悲しみ歎くあの方の心に、勇気を与えているの

ですな。

ハンニ それが、真実で有り得るものかな？ お答え下さい、神聖な神々よ、

予が、死ねば、ローマの栄光が、光り輝くものでしょうか？

宿命が、予の破滅をば、確定したのでしょうか？ 一体運命に定められているのでしょうか、

我がカルタゴが、没落し、このハンニバルが、血を流さねばならぬとね。

しかし、確固たる、不動の平常心を保って、予は、我が非運(破滅の運命)を待ち受け、

雄々しくも消え去る心算なのだ、たとえ、不運不幸の拳句の果てだったとしてもな。

左様、貴方方憎しみに充ちた神々よ、時ならずして、貴方方が、破滅へと呼び寄せた、このハンニバルは、

今尚、昔通りの姿の俣、武人らしく斃れることになりましようぞ。ハンノーをば、死神の双の腕に掻き抱かれた俣、震え戦かせるがよい。

だが、声高の噂が、今わの際の我々につき従うだろうし、

我々は、自分達の最後の絶叫で、おしゃべりの神々が噂する声を掻き消してしまい、

地上のその轟音が弒して、大空に怒鳴り返すことだろうぞ。(一同、退場)

85

5

15

10